

口を育むという視点に立って口の形態 から機能を考える臨床への転換を目指す

角町歯科医院

院長 角 町 正 勝



■略歴

昭和46年	九州歯科大学卒業
昭和46年～51年	新潟大学歯学部文部教官
昭和51年～現在	長崎市出来大工町にて角町歯科医院開業
昭和52年～現在	長崎歯科衛生士学院非常勤講師
昭和60年～現在	長崎大学歯学部非常勤講師
平成11年～現在	長崎大学工学部非常勤講師
昭和59年～現在	日本口腔衛生学会評議員(平成8年より理事兼任)
昭和53年～62年	長崎市学校歯科医会理事
平成3年～8年	長崎県歯科医師会公衆衛生担当理事
平成6年～7年	日本歯科医師会保健と福祉のあり方検討会委員

小児歯科を専門に開業して、足掛け25年を迎えることになった。開業当初は、う蝕洪水という言葉で象徴される時代の中で、う蝕治療に埋もれる臨床の毎日であった。しかも、治療を待つ待機患者が、3ヶ月から半年さらに1年待ちという異常事態であった。

しかし、開業10年目を迎えた昭和61年の時点から、来院患者（新患）が減少し始めた。そして、この傾向は年毎に急速に加速していく。診療室現場で感じる少子化という事実がのことだということを深く実感した。同時に、私の診療室における臨床内容に、変化の兆しが見え始めた。それは、予防を行う患者の割合が、治療を行う患者の割合より増え、その割合が逆転するという事態である。この傾向は、最近の長崎市内の小中学校の児童生徒の口腔内の変化に見られるう蝕の減少という事態と一致している。「むし歯のない健康な口を育てる」という、開業当初からの診療方針の中で、う蝕予防に向けた地域活動やそれにリンクする形での診療室内活動など、一貫したう蝕予防活動を通して「健康な口づくり」に向けた歯科医療活動の勝利であった。

しかし、この結果は、歯科医療活動の評価としての診療報酬において、「小児歯科領域における診療報酬の減少」という、皮肉な結果となって帰ってきた。だが、この事実は、「むし歯のない健康な口を育てる」という小児歯科臨床の先に、むし歯予防という口の形態の予防のみならず、「食べる・話す」という、口の機能に着目した「口づくり」という臨床」があったことを忘れていた付けと受けとめている。高齢化という事実は、年をとると全ての人々が障害を持つということを教えてくれた。また、発達期における障害においても、中途の障害においても、障害を有する患者の多くは、「食べる・話す」という口の機能障害の中に閉じこめられている。口を見ると言うことは、その患者の生涯を通して口の健康がどのように患者の生活に関わっていくかを知ることが求められる。21世紀の小児歯科臨床は、この視点に立って新しい展開を図るべき時に来ていると考える。